曉臺七部集　下

イ　4
3157
32(2止)

驚ぬくゝら

来もせすうつゝの那しくもの事の起出ぬるハ
ミなもとさ海よりする秋の夜明船ハ沙もうたひ
船人熟田のワちりよ船出しんとす月よ宮
ある隣の宮の声ちも残けしふぬるよとや
此鳥のかうしく啼きて二声よ一声由てくよ
光とたちさむき朝戸わしひらきつゝも見
わたせハ霧よ来よ雲わたひしくあゐつゝ
旅亀の根笹とさのまつのきたるまかせハ
熱田の船ハ出さし須賀の浜よりそくハきや
頓負ハ女の童なりしとゆうしり家の子銭よ二人



14
3157
32
(2去)

こゝかしこの閑をいつくしみて のまなひ わするゝ
よりやゝひさしくなりて 職の緒の色浅ふかき
ころ女さん琵琶の古橋はわたり北妙喜の
仁和寺は鳳凰山に立客さりとてやまる
あひたる女の遠き餞に法師のさ酒の形代に
紙衾(かみぎぬ)さゝえ給たるを松の一枝に引かけ
枝に切りかけたる中に孫して馬かよの中にまかる
我やあくばかりの御衣(まき)によるべしけれはつくれさる
きぬわかさし緑して花ある所のまなむ
風おくりさき童の山根を色わかてたるまゝに
日のさしたる所人のふ時なれを給ひたる新り



うらみとこそ給ひたる給やしてきそへて松くらせり
人の身をも孫をくらまして浅みさらめてさへし
雲をさたしめて孫んせて気まて孫しても
物も形しくをこひなしぬ世くて私法とふ
津高の川つたひ水路をしく浪金の頭に入て
空なる苑蓮客なの墳浅孫は給してかやまかる吉法
師の立句ひとつ捨てちたまれて一首
すまき給へる事発るひ世をまて里の長(おさ)
此山か家に此さくとしめしかひをも尋
ぬわくしめるやわかき集く日や入なんにて
さあり給へとそいつくし形のり手の里

まだあかき雲方のけはひもやゝきこゆるまゝにつくり題
うき筆をとらんとすれば出しなめり
ある鶏きけともちひとつ鳴を為しなば　士朗
ある猿やふたゝび春雨のなかくまで　若英
書く殺人を樹しぬまでは今宵なたなん冷ゑ山の
きえくしけまゐらせんと杯のかでくらめ給ハ
ひきよろこびて杯をさゝぬ
葉名の蝶白く杯の中に烟の中にさえ浮て
物為家帰二旅情一林巒為二夕景一とひさしも好く
あるに一入て更にかはらぬ蚕の糞くさき人の杯をつかるなく
太の春吼をの笑みしくしきく　[illegible]



ある夏の夜に發報つきぬといふ事をききしものたる
ところを阿くさき會りのちから遠ざかる身にうらせて今宵
發貫日にかやうなる後にて新むけるに
帰りてかんせつに扇子紀の始まきはりて
彼のむかひの更月能ぶりの夏朗
都をも古今のつ出よりかれし若き伊勢の非實
亀にとゝをかけいとしらず蒸にくゆくて家く
新つんまに取りしきんの杯をさかひ春雨すうふつりしく
名へふいはきやすつるかくへるの鼻にしきむけんふ
いかよ日をよかきらして出る為なもぬ後もまのかんを
いふ成杯為しんよう為つきてまゐらさうよ談

去ぬる人絶しや卯の花
ふえの声きこえて胡明の月の夜すがら
いたり過
　胡日ふえて茶挽の寄の光かな　桃青
葡萄の葉茶店の中に紀源の山やいさよ
ひ盃ありてめでたの月を名残に立つるも
かさね杯なり
　蛤や貝やげ女も躍けしのまれ　其角
今宵は笑の影よやどる松もし山し野風よ
枝戸纏形ぐれ形とうしうぬ萩のよもすがら
たゞいつもるてよのこ治ひうら



西施ハ越摩の西施と申ゆ名まゐらせてて報て
引きて其ゆくうまで祓ひまくつきまよ彩
ふうまく形の物さしよ刻形をる花あり行く
年月の果て墨人をゆひ待まつわて佛生会の
花つきよ出あるりと念ふつりすゞみ成形く
かれふふまて中きくよ去すみ浦て以て縄を寸紀
さと形繕ありてきて白浅い浦くよ云ま去らめ
　灌佛や花ばれ花形と罪も流　桃青
　山を入る日は行ひ出よまるむ花　其角
顔ちらうく出らまゝすしきて
　虚りとや見まりさましけ友　董　桃青

なら山きたのかたに元平か娘出しに獨参くたれ
物語をよむ

二上山の文字をよまるゝけしき　士朗

なゝ山はやなてんとなふ人くふ新かりゝまたれ
の事は行くへも事をしらぬくも咲みよのかなしつく
むかし絵物語つくりてひとりにて新古今の文をきて行かたや
まゝひ落るよしと家人全る人の肩絵をかきくよ
物語かくのつかふとてかなしき新むかしさて新
の古かくをの行くし所よの古るを行りなふ
さ紀の男のうら衣蠶るもかのよ徒然川と
行きてせ紀古今の字をもとあつかうさ昔語集



ひたすらにむかしをしのぶ昔をやらるゝよりには
つくとさにまかゝさ俗にひなてむかしを見るにつく
らはつゝ両うちをけくはすれわびことの
たまへ新古今ふらもふぬといひつゝ新古
行かまでいぬ思はまとてのうちはくさ新わ
物をしるといふつれんをなさや哀ひとく絵
れつゝん絵とれひいふさけまでといふちゝれん
見えしはなれなりにてるのと浮世のならさるを
やいふ人へてはいふすや勝り人の古今の行や
まちかまて八必旅にても筆行まじくあくまち
古今にあらずとも行のまうやわざとかとけまち

跡さやかにすみわたつて其寺の清仏に称させたまふ
せしすがたは山を中すぐさ方に歎ある
石の肌花さく苔も乏しく清りき　超黄
菓子ささぐ此寺の名ありさけなしわ花しと
いへれば方士あやしとききしに此をは肝ふとくさ
男のよみせしに来りきて文のさつめりしけしと
好みたる故甚志のとたのしくしてんなり
すこと懐にせしありけるも蔓の浮橋とらけへ取
西瀬ゆかりよく漱田の橋にて渡すまてにくして
斜陽の中にたつされよみちの本まの大芝
泳ぐころ残すなるとなく



青嵐漱田へ方へ吹き落る　忠
雲れん以て家毎白銭玉章の後しく吹えたる
見在白のまことは何れにあてらまてならず
つるときやまぬ春宵は霄の月何かくる方あさ
新浅生おもしろくうみにさまして走りく夜泊す
虫ききて声のあへや嗚の月　超黄
来る寺にもりく故翁の墳前に詣でぬ
椎の花扇に落る音しころ　超黄
生は世志と雲字ぬきたる塚の夕　士朗
三井寺に手まいらつ
餅かまるや三井の仏の光かげ　士朗

女の童も数へれなやくさすほしとて里つゝま
もひおもく形りも鬼貫らかへなれおひなりて
是の種たつ孫たるは喜さき満ぬ似ひなり
捨しへたるこそいとあはれけれとやもくとはあ
ろかなりし梅ての謡のそく〳〵泊まつきて

鴨川の水は月のつく〳〵四月作　紹貫

此宵は綱とくやとるまよまふらく絵むさらく
智音に文其阿ほハ形ともちうれとこゝの
あつらへけるま銭なふのつきまでしろうち
わかすまついひとよむ梅もすの闇よなり
するくも筆馬出来りぬるふいらまくしと



いぬよみきるの温泉よりまちくべ夜中まて帰り来
ぬとなりぬ寓(ヤドリ)ハ我もとの人々と来る〳〵ぞ
半化なりぎなるほ給ふしなれまにかゝる小縁(オホロゲ)
なりぬなとといふすきめあらまさてわのまいらぶ
是はかのわりしき婦るゆすひなりと語り合し
酒宴し有りべ千秋代婦りたるまとふとはなの
ことしともちなりぶ猿のやとるまとしもわり宿
なりぬわりし門後くるよ御さく来中すん
数ふ名所蓄商賣の阿叟の旅徒史芸之銭供し
十わなへ教なりもろへいまさゆまるら姓く文録の
由くろのさ色くとと来まかくしらひつる筆

ことあり思ひ出ふ音絶の浴よきかたる我宿のさら
師のやうまへ告やらもたまてハ此様をつたへす
日我ゆすたなありとひ絵へるなりけるそにてよ
顔ハ夜やなけれれとも偽り出ふ
明星ハ文芝とらを来りて我説の歌よ出合
待る事なかりしめかけるけれいひ合すること も
よもかくまひるひのゆすたりなかれやゆかし
洞に落しく 性はなくまいふかりの真ハ
師とたのみて我の友かま我ゑらし出れしく
此ふすしたまふ我ことしとよ東山なのさしく
見え来ぬ地色よゆすらてゝ



なくしし暁け地色の桜の空や落ん　几董
花つゝし抄りへハ夜の花しめ我　京 定雅
なやしてもあらは人声の山花系、　美角
夏陰や鐘ま名かり田全ひと　文芝
由ふ庵も眠しく暁探も眠しおく一声我
詩よ目何あり
郭公きけは我蔵ハ親み志とも侭しら　峯馬
長安万戸子規一声
杜宇南りまひ折ことを　嘯臺
絹織に似り
ほとゝぎす椎の闇より出て大井川　京 蕪村

筏代踏く新稲ゆふ安うふ　、几董
雑因ゟ苑在樓に雎鳴しく
みしり涼く夕自めたる嵐山　暁臺
夜の山たく岑旡く兼よなり　寉嶋
小倉山簾の子やわするゝ緒の穴　士朗
桐咲く漢織にあるなる色ゑふ　仝
京より
蕉る牡丹や汾やに姿浅る月の漢織　蕉黄
白槃粟に焚尖ゝつゝるや漢織の畔　暁臺
蕉栫舎みゝし
茶子棲る人ふ尋く恃ゟ飛鼍　士朗

すまり盟の月ハわりひろけたるみふてなすまでも
紗蒙ま海ゟく待るま人わしゆくる臺のこしるま
海とくくしとわしひさゝうせく心中や浄華の
わゝゝせのふろく杏りひしめかるま於を
うこれきぬまて露人のともひを語くるぎさく
よ婦きうりぬ
大宮人の袖にすきゆふみのし　士朗
國のたより西満万歳の書のましるま
古さしるや今ふ汝蘿川よ文衣　白圖
縺絡の声門いる計り孫むさし　川央
夜守娃言すみるよ立し墨ゟふ　子東

涼しやこゝゐのもし乾ハ庵を出て　　羅城

草の根我ゐ段々の雲ゆる　　何大

月のころは我は泊らん川すゞ　　万岱

日に楽中の牡丹を乞めく幔かな　　亜満

双林寺西行庵懐旧

人老て何かくれ桜のわかばかな　　十三ハ 大魯

恵ハ善薬毒ハ五月のつゞり哉　　士朗

麦ハうらて故さに惜る留の春の暮かな　　暁臺

門徒錦かへてもなしの連哥すとき

哥仙切

夕風や水青鷺の脛をうつ　　蕪村



蒲二三反案しくしと出る　　宰馬

きこくしとこふ節より節と遠く　　大魯

十日余りをねかしやとかる　　士朗

一声ころとるハまだく月の雲　　几董

清く高く山をあくく秋の声　　紹黄

かくまかり萩刈りし人のつま　　美角

鍛冶のつゞれ　驚いてくの門　　暁臺

鼎居る方はやに細さ水の音　　丈芝

るる前まてしと松のつゞきて　　嵐甲

冷えらさき殺磨くさ石のゝりや　　紹黄

悔まくさ雲よくくとの戯ふ　　几董

月さえておりく雲に雁をかゝる　宰馬
笈の佛のおもけなりけり　蕪村
いつ見せん此夜を人のなくさむれ　士朗
皆は始る更(わく)綿たつ縁つ　大魯
古家はこゝの網へ当てゝ花の露　嘯山
黒の春やすらに眠くかりし　丈芝
雑煮くふ山もとも人数多なり　嵐甲
小家婦見まゐる小栗街道　宰馬
放ちやりし盗人恩を報いけて　蕪村
吾俗縁の兄なりとにふ　士朗
浪よせてふもなき舟のうへ　大魯



闇の小雨のたえまからかし或　美角
冬ふいせ事は無事する人やそれ　几董
浮す堤うなの寸にの番所　嘯山
洪水の水打て志き布にお透し　丈芝
春の明る昼　南の庭　紫貞
思ひつゝ菜采る吉の嵐そえる　美角
みしりさ放の蒲そそさ林　嵐甲
象(キサ)の遠ふ沼の汀の寂しさ　嘯山
笛の葉書の思ひ出ありてゝ　大魯
昔さ經のたもちは持たゝく富　士朗
志すし梶の官銭あつかる　蕪村

櫻さへ暑よりさむし峯の花　几董

日影のうけきむしろ畑の牛　暁臺

其頃したしき大魯法師にいさなはれて阿叟も
去年も難波にありぬ宰馬もしれのゝ尾張
の旅は帰りしを浪速に迎へ二十日ほど
とゝまりてゆくさや浪花に遊ばれしも又すさ世にも
浪水は道の船のまちまちに又おりしも自さに
みやこの空もはるばるさりとめぐりゐる桜を一
行の雲にまがひて江口ぬ鯨に聴くなほ世に有
梅川のほとりをとふらひてつきするなる
水をわかれて船に第ありて世せんすへも

ゆふまぐれ年とらまし水のもとみゆかまへて　立るり

年らへや梅の八ほとの水環　吉胡

をとこ屋はまちらの見ん哉

夏の山や雲立るとまかる　松浪　暁臺

翁都の帰り出日さへ篝火落演しもれ
ゆくもわりく旅ふして難波の岸に舟
よせ侍る住ふる河東に大魯法師の草庵へ
從ひてしらせて事とふて師をおがみてと
かへしわびことさとゝ有りて継ぐるとふふともかの
とばくつ去芝翁の消息屓ひ来つて今まゐり

伊勢の方は西向るやとさゝてもおのまてしも
難波も伊勢の西より妙まはるなめらと
中緒まは師は祖翁の田子の浦つゝしなき大
伊勢の浜うけて日出るなまは北は妙ふ
海しさましやかゝる半のまなさへしなる
背さゝはしめ何と浅妙に逃ひまて人も妙ひ
またなもいせの方は妙ちんやまとてとこと
築ひつゝ浪花にわたる
何くまうつ何くし妙京雲の江に何きん
妙の字くに吹出ゝ
涼風の音く経にまなり涼しさ　吉朝



夏の夜は夏中まう清くや幣祈る　朝貞

女の意のまゝ中かせて経奇戯場の興ひ音
はきさひ給ふ
今日は経浪の余波なりとて高津の臺に
出まは一眺千萬家山に一所は常に支流百
十字は次
むかし経水は清めて川涼し　朝貞
姉たくひ続きに舟乗しく新道のおもむ
ひきちゝ大津に出る時に雷雨何しけ
暫時陰晴
鳴神や家々比良へ帰る雲　吉朝

此あたりハいつもきのこゑにあらはれたる方く
れまゝハ筆さしぬらす日をかさね明神を
涼しくゆく田むら川秋涼る
結の岑よ網目にそれまた田村川　喜朗
梅の花飾と申ふ名のかうしをまたハ
梅の鼻吹うへせ表へうし　竹翁
是より高く低く山つゝれつゝ家あや安
尽ぬたより花鶯うたまし嘆く八合を潤を
隔ても余多の声残きうる朗ならた一
声の杜宇多くするや貢日吏を黄鳥帷
散もさ嘆すたゆりと



何やかゝらく鶯やさきに鄙に　竹翁
これ吾とかしこく烟霞の痼疾なりとかく
しく雲秋つきすまて
中々夏深山ハ女松のけむしさ　喜朗
関の故なちしれ出る鳴らしの鳥居をわ
東ふ向ふ右のてをききのふなすゑらしは才
ひ鶴とハ志れとこ山あるたてるを
涌こそれのが是非ハ第をおとこしくとそ見る
うれかゝのうらむまつく後の五十串を紀
れ云筆作ふしさしめきもしめでた遊り
有ふし後しく絡よいのしん串を終ま

戸つるゝ志賀浪津の里つゝきこゝろあそひし
雨志ゝきてまくらたまぬれて志のゝめ田家かな　きく女

むらさめや淡に啼入雲雀の音　几董

ぬるゝ雨に女是田植の笠かな　士朗

卯月もとりとり晴日杉の木の宮祈に
まうでゝ忠中つ清濃川に垢離して　遥什

うけ波に香に卯月の後かな　士朗

杉に風心に聆する薫かな　几董



安永甲午年五月

尾張

枇杷園士朗

鴎巣都貢

佐渡日記　越出雲崎旦水著

佐渡の志満にわたし渡り金北山にまうのぼらん
と越の出雲崎の人々とともに舟ひらき
するや朝明の海つらをひとわたりして
めさし風ふかくに西涯おひつゝ舟出すへきも
ふかしぬるものとてはやまにまうてこそあり
漸初に風やみけする船めて夜往の江の絆
ましは社にゐるふるまに人を敷き四ツ半より
発句詠さゝけ晴経のきまつり旧白て
六月十二日なり

雲の峰にのゆ清ひとうる夏の月　暁台

ちるくわの色の砂ま二百三百ゆうくえくしぬやゝ車の到るかりて雲をうきしくまらまりけく風をよまきうるなれゝまし八海哉の雲をしおもろ志峯なりし月をゆりし東走かまわくらしんと手織とりまかひつゆまし星とも里意赦ともハ絡をうち見ひ歩まへ舟よりをやゆるき波がいかうきたしとあくうらかされてゆかる行帆まひくうきやるゆく暁方小木の漆ま舟泊たりて拆ゆ海風の清く揺曲く舟綫ませんくれまゝ



人々の歌ひ綫をしめ扶々の歎中すて家まて乱紀しつけく相州の鼠くうくへせしるさまれ隊もろく二百とゆふろのわりてみくゆし綫とゝむ安蒲の継みをし横ふをし鳥綫綫ほし芸なしくするめ綫わわく出れをが日ま芸慧ゆうる白ひの宅みをこをし家みをとうつりてゆとそあぐるし夕涼みをし日和山ま出きて見るゝま衣かせのとの西漆呆綫きや中売うくへの玉閧なくつわるりま売をくハこまらのくらをし

ここ也

夏の雲ゆらしや綫を白の帆　暁台

なふまゝかゝるく岸残桃くも白くの
ゆふまし残菊しつけ世と見れ岸残ちらむ
今日最初まで萄ふる牟時売らくや ぬ泳白
りら田ゆまハ海さよと やひ舩し小ひえと
いくるハの甚ゐ寿寺へ中ようつみちちまく
光寺志きくゝてる志け来らさと いまし
かまり日乾出え残ごす石洞ま家瀬つまく珍く
と販背をさ同しまき螺蚕残めたるまも
清ま入ルもしめ空海揚を巌まく𮭫
斧をとふるまく金堂寺まもし家狩を出あ
まるふたる異場也

来るく峰ふらし桜まちかね　只丸
夜山の雲ま朽たる蔓乃那　雅仙
来ロやミ水のそし未朽れつゞ　鈴上
水藻やこまみ残しと萱の中にひ　文雲
なき桐川より所の人ゆりまぬかゝてゆれ
やすみしとゆかをわらまり川をあゆりうき出そ
りそしと村山の小曲ま憩ふ澄くぶきの六酸ま
耳をうこりし菜八苔くて眉残をもてむ
麦枯や澁鉢たまし　持佛堂　鈴上
こゝまち志とゑるまひまるくちゆるくてこしとよすわ
なるみくのゑさまハ晴さ沢濁なる精しよまま

入りも切りなし切藤蕀胸つけしくもふく
笹川とよへるまではく秋さらひ四里あとゐま
濁してかなかるしけさ
　　　　　　　　　　　　大雲
きみるの源の地図ふ蝶をすさまき
　　　　　　　　　　　　駟上
水くるんあかるや蚰はもこ

西前といへる家は御重銭出世ぶ山なりを
やし銭よ於まふりき宵ち入るまかはりして
検(カイ)あしく文とまるや要かゝれ山と縁[illegible]
切あしせまくへあくしとそぶ御まゐすりき
きるあれをゐるきより水銭ひきお[illegible]ま
流しく御金銭切るしとおきをを業すゐるきの



かたな家

　　　　　　　　　　　　　　旦角?
早拾ふわりむあするめこ純泉
　　　　　　　　　　　　　　大雲
清まふとく宝の山をと文まし
見もりきのわとすゝしたまとやまむつりし
かし残つやくまさ学の花を流ききく犬
須への濱をしこえつ部とをゐめく
　　　　　　　　　　　　　　雅仙?
花もるや於志角きりのわとゐて
みあたりま古民銭要をとふおとは古へ
やこし成さ人の粋こあまく叢中まきし
　　　　　　　　　　　　　　鉄?
きま未業ふあほちひこるとつくをハすくく
柄みくさる家残の男の唱しハあまるま大阪の

ち海谷合の澤ハ此寄の小わけりくみえたり
　双れさあし破や
此清浪近幸のけしめ玄まにかくやまし春ある
波まよせく郭をとひ引浪まはくく還彼の
父帝残すうちを世路ふさらずが如きまおゆまちせて
此の浦といふ寺非れ入江寄の高濱海岸
樂樹の発れく見る松わくて残田まて三鄕ハ
弟一の風景なあまむろへ十步まて変れ
　山まよる
琴残ハくさり人ゆらん玄本立　某紅
　水まよみ



ゆらうえをみろうて壽う雲の岑　嘘基
深しさま第ふて魚とし浮ぶへし　鄕之
胡録とらいふその坂まち浮らんいふとり
先祖の陵ハ瀧本のうらの民家残なれきし山ま
よつく入る本十餘町陵胡中絶言の戮せ
らまし給ふ玉中てふ所みく今ハ田中や
清浄院の陵残稀にとほる鎌倉の小案がおめ
舟ま放ちかひたる懸日の濱うたち残なまり
ままち花ちをる強まみて まをまハ兵本営
王四郎号残錦アまり 堂の平の小松がまま
某まてまこそ残かりまく 郷の宴所残わくれ

ふしの影はすけひは為業の詩はこそけ
ある哉花はとりまく名哉起わすきて落を
さしそ此花いり升僊山を助けなりしふや
あつぎくは其根たえし今も枝毎に咲
出るりとかり王ハ起りまさしてしをれも
文あつりしきひとつあらし
花に感ならも今文なりまと筆　文雲
此しやはうつりて在しせの流れともやし　此
餘年當に至幸哉みえ給は程きはし
給へりしそ
ねりひこや雲のうへあふれはまて



其神の入江にさつてんとふ
とりかせ給ひつまとき八磐うとの松原うた
小やかくて瓊(アカリ)の宮をやすうけ中しけ給ハんと
やの富士とくそ池の葬人のこす仙國王に
報し仙骨哉其蓬萊忌のへに蘆蓽に松さうて
去るしまかりてまうく極ハ朽く蘖(ヒコバヘ)松ハ五百
とせ哉り次枝葉重く起き人なつきぬ
つまたるも鳥誂き哉りけ為緑るうつしを
落し去給年哉繋(ツナ)きる哉殺てめでる哉
穢し以し仙骨哉名をけるふ易るる哉
いたらや　きこし　名まそそ

大樹の命ありしかバ志ばらくあしかきゆひ
及ひ方五十年間松樹のつ志捿しきを跡机哉
禁ふしめらましかバやかの宮の丘
御廟の松も毀しける凡人ぶりを御存真
全く古つかけよふなるを勿しさりさ唯只哉
法をむすりけり
時の蝉も賜はりしみ〳〵ぬべし　暁鐘
日きく著うさ志ん梅寺にいそひまぬひしかど
情にゆかしく一夜をとゝむ枕にも北野志ん梅寺を
後に二とせ勿皇居になりしよりそ後堂の朶に
移しまゐらせ中比上楼の新にかゝつく



寺の一旦破壊すといへども実にしるき縁
ありて再び上観の法会を行ひし事永く
御廟の洒水をつとむる事ハ於方かけれ
精舎なりしにたまさか此所にまかりてあんずるに
頽廃しあれはてしかバ
秋の空深くまつさかしく叢菊をはふ事の更に露ハ水哉
塀さへなるやうに草のへふるを萩など
ありとも山より雅中川流るゝなりしくも
墻にハ蔦の葉風さむくまちるさまをまたち
坂の細声の類めかしきもをあくなりしそ
たゆるなき〳〵ひや

撲るに寄られ星のひかりかな　其水
ちる世葉の玉ちり落て露の香　孤僊
佛の夜落ちもこえて眠し　丈雲

さしのぼる月に嘯き声す罔両(モウリョウ)の感にふれ
れハおのづから上に夜気むかふ絶えすふれたる雲衣
つきるにかゝるハ我へ生る魚のしのぶつまを
ゆするやうの幻にこゝえりしする羽をさせしめ
おもふに凛凛(リンリン)たる宝師の心ふ玉成する時鼻洞て
ふ残ところの名れもけ中にくなきせし
宮地明とひふ香末ともとかる夜あらう
まりハ仰ぐに一炷のかをりをかりしとて



たゞやうに犬ふ松さきけ
みじか夜や仁治三年うすず　蝶　其水

けぬの夢もせずにふせて人を寄せ足崎ひさ
その加番うわさ似を安かりし
すれ入ぬハ舟ぶく流されとく晴日舟ゐき
給し至候ハ湖とく巡すに出つ風をとめ
ひぬとく森にまうしく次根のさしくゝやる
窓の定る流につゞき二見ケ浦の松本をかぞ
つくの眺(ナガメ)くときくとをとのハ金小山
山巓ハ中天に聳り接ハちくきるまで何代
麓へかゝ比(タグ)へいゆくつハ比叡の山

とつまで落まで扇ハ鳴の浮巣なるに 其頃
巳の刻ばかり舟を浮根へよせたりける
佩たる主ハ雅志てしかるを抱よりて志るめ
るよりお川へそこをたまいしと拝ひまず
すぐらしく出つ嶙むべし頭仏脊ハ六尺
満るらしとおもひやて肉つき腹ハ得くと
大艶のごとし渠きの山ふらに労せずて
足ハたゞぎし形よろしくたゞづきつくたく
まうちぬりけるを半しと写すにやまくに
痩たるけ川真ぬとかいハなくしより柔
せしまも本譲せたるの肩骨をしひかくと



ゆかしむいよく柳に牡丹咲せたるやうに美しく
おやかし
数ゐとありくお川にかしきハ年比のやう姓
そのきひしき没しまたかはらしく府内に
なまてられ舍てきとも思ひよりやりのなも
同じやよりあまたいひと欝悒しし
家ふりまく夕気にとて志ろつきしに 紐仏
おきなしたなるしの男一つまやるまちりて
歷ふみしゃまのなる先にな所おとしに川合せく
皆人さ偏をみれさ並一国の法ごとくにおけ
ぎしらぬ思

次の日越志の小名ふましき金銀涌出の山
境まて見越は山ハ峰の空草枝茂く
限りなき寶のあるし中ヶ寛しくして
此市の気ハ煙積混し奥き事ともいハれ
よきものわさ形ん郷とつかしゆめうるふ
風流の上ハ通しき次の日又厳へまゐる
つしたる杉しま猿のしんと猿んまここ
越志国を舟ハ繋あらんやらいや
此の猿町と以魚る殊よきさりて婦女郎ハ
猿哥残きりて

月かかし鳴頻ゆの夜わさより　暁台



ついたりもうき経麻仏とふハ故中納言五十中ち
夜ハこゝ小倉亜相公の為ちそ左近の神へ
貞享のむかしめしたまかれるも辺世経へハ
おこの觀音寺ハ鎮まりめまりわさしつき
例のことく二の碑面ハ

故左近人藤原氏之墓
藤原氏一舟之墓

猿後ふる國ハ潤ふ錦しふ　暁台
蛍ちるの残ふきて蔓珠沙花　師走
墜後の碑古きふあはれ
此後わこめろうく小方の隣ふる春日壽

に吟ぎおは侍ハ喜く沖へさし出て千網の
漁百人の出入りまたハ千艘の網ふりたるか如く
斜陽湊を照湊中また高低ちらハ東西南北
銀星都ハ海の都とハ婦くまぐめぐく舟綾よ世にはし
はやすきつく宮る舟ほまハ忽ち瞳に及ぶ夜の風
光の優なりさ打ハ地勢の奥なきハ虎卜
湊暮れし上にも幾まるひくきはなき　暁臺
松湊すゞしひやゝく浜の海といふ文なよ
すさめし
つゝ藻の葉に浮ぬらふ鷺の眼ハ　兵水
初音ハ今朝はこの今戻るへきまゝ見えたり



とゝまり先きのめし契つかひとなりまゐらせ
おち出る蛯しさるに猶もひとけ人ともいかにも
銭の湖をミ渡く金の山をぬきあまつくる根
あえしして明暮出んとてさうざもいときものよ
よりつとむさまと菊ふるハ舟つま歩ものなる
事かさしといかにせん今宵の雲かきたえて
て今を菊えてるへき風のそゆちや胸ふさかり
とらもく風をとひ雲の行方をはふきて
心関す嘆るゝ風さしとなれはり青空果た
きよき月ゆてまるにすゞくしみる晴ひはら
て我つゝるひすあるものいふ夜に俳諧の

好人ハいかり富夕がりゆすり志まず思へ今日を止
まかり給ひてむくへんなんとせんすなはちなり
に夜去里給ひんとすハ是つてへよしとする
文字ハ歎白をへてこころも師兒わり殊く志き
たゆるくおもひて我妙帝ぶハ古さき末世の白衣
謝て昨日由なる人ハ花とりの一刀を紹介す
ともに鳴呼すをのせん八何と記なりんま也
金北山ハいかれにて志て攀峯一畫をして清らを
茂ろす家代製衣世縁寄まひたまき雲代呑
雪をひそて渺く千附ぬらつさたむけ次
旅ところの淡漾をまでかすも杉ともす北海一呑



の形勢なりとも
英雄の水半由ひさ洗ひにかり　曉基
清水よしむ次りんとすまハ雲起る　鯢翁
山裏ハ墨色して高みをまのた雲夜がつてすをり
うしろ由あとをしてゐるたかくして枯木代守せて
築しれ字と足の杉まひ地まつら次芙蓉る
岩尖き紫かつさとひ樽るをし嶋たくるを
とのなりハ昔ハ左へつし上をりまたまを𡽶
流のごとくろうく寄月白山まてゐる
出羽山ハ羽黒権現の志めさせ給ひて安置至
山のひとつかろく志き霊所なり

杉ふらし平りる曲山ハ風かくる　曉臺

明星より経をたまへ湖のみさハ夷の湊に
やとまりて湖上の田ふ眺なきしらわりてハし
廣く長く水ひき渚へ行かし舟をのりた
つゝきて鏡の上の蜑わひそよむしききる
のたゆふ六月なまへらぬを静ふ風情も
わたく　暁台

鷺の子の際なしさへむ日和哉　鳥紅

魚飛て水脈ふ月の影きよし　路上

今宵の入ゐるしらい山影より小木の湊へ餞
旅ふなりらん月渡しく陸路をさしゆく



乞をかけ波音ひきさためく磯路の難所
越たるとえやハ通ふへき三篇なれハ舟にて
渡り路へ行なりハ忍ふひ路ハめつ聲かれ
さらんやとハ舟にてかしこに着とそらう
漁り世けハ注得る小舟もしるもたゝる
あらわ蚕のたとらしきさしれ数やとれる
屠まふ足もやる世なし蜷に鬼ら翅をと
宥したのしもこしとわりそろし

蚕に聲に糸ひく秋の夜さむ　曉臺

夜明ぬまふやらく舟に乗る旅舟ふてむ
御ハなくさ海や和らなまハ汀七八夜はけて

わしやる谷あくろう山六ハれ海とうき遠ひより
たるやうみく腰ハ浪まうたつくしきすだく
ま割るるうごしとくこをつまるまたくるあまり
蟻つくふなるうりの磯路老樹片幹ま曲
らま夷或ハ倒まかつまく本末ハ波ま浸せる
あとも残画まうつしてあくるハ幽栖ま飛棲
いさめ、あへしかくたるまむろへ見んたらん
ハたうとも鵜瀬く山そこもろ見ん津続ま
入る心と海ハ浅し
磯家十あさゆまりへく波ハ何となくひくま
往来ハ鴨鳴岩首村とふふあたりかし



ゑりさいはかつまく魚も網代かゆまへ俯ま満しとあ
るる盤窟のうちおとろまへ人あまつ穴居住と
いふ婦もまおとしと上まつ代すと人の代とあり
てふわかく八峡も徒へ住みは今ゆま俳諧さ
まあてきたしとふこし國へなる所まちたる
ここちん

源しむ男ハ荒和布女ハ二幅　丈雲
人は穴のことゆよは文曲がん雪　郊上
鳴神まよ他逆穴の栖り南　其れ
鶴舟のあるふかつてひつく魚買ひ求めぬ
おを代ずたて切まさるまて夕餉たくふ十日てふ

魚船さへ見えて名にしと珍らしけかり日潮ま
灘きて舟の中笑ふて かゞしとく波の持さ
まかりて漂ふ由るあらす 獅ふとふ聡めるを
とく船底よりうち那し給ひぬるよ丈雲
船る男光ハあふれて手も来て目を剛にかゝる
たくうめくさまよう見えてさ出ん船ちとまやうく
青女並清く給ふとりの訪ふて分け聴くふるまゝ時
いよいよつく驚ぬるよ未来のゝ船とへてしかゝりて
漕わかりし方ぬもなくて日暮るまゝハ下
の面目のゝゆの底よ光る船子のいふかう
驚給ひとてありく恙波つゝの光来あそさま



やるうとさ程あやふしけれ共とて舟ハみさし
波ハ高く危く漕へさてたゝく御かしとひき
験よなく足水船のうへ漸くて鯛く給ふかり
声残りうし未練の舟子いかのまゝうへよこゝ
連なる岸よ給ふてやうん日ハ磯輪かなしれ
まへるへうしれ世界やうくと艤たくつきくさきさ
けれ共浪とかゝりて櫓とたけ中に漕まゝ
打や我まふ漁なる舟の音すれりと
とくすかし音りかなにもひ聞ふあ
まも船しばらく甘すく漕まるゝ逃ひすん
かなしむハいつめ船子うかぶ拾ひすとみてやしハ

いかなるゆゑやありけん出て来りけん度こそ日比の
物しり新撰をなし給へる郎をさんかうすべし
とはいへど参考とせし事あり又三ツの列しては
あつて漕ありしにはあまりに磯ふかき史の二ツも
うかびてよせくると艪をこぎ出しておりつ
金の山木の船の上に並に乗たるも陸より
見人の声ありしが舟にて危き事なりこし
東風の烈しきなんにて帆の霧けしく波に
なりき命からがらなれどのがれきて舟にかけ
ちへはにも躍より上りよりよせがまかりしが山の
金ずまにもかゝりにかゝりしうまずかるにかち室中になし



三日といふ日和つくりは
なれやけのここに孫よりおこりきて浦出船
ありし琉球楼上の人北の事などとおもし出る地
なきらしく見えしの貢船出帆に比せは瀛蓬
の二島などを大島のめでたき事ありへけりとす
天票充貨の
皇朝なるふりさしめやたぐひなしめや
六月廿五日海のうへすゝしく舟は出雲崎に
伸りつく親しき徒ともくる事なれば
賀して此は唱ふ

于时安永四年乙未七月浄雪



飛去りし
千里の游糸江山の花影綫瀰（カワイ）く
語らとして流き書之紀くりて
月下よ臥し深くも月下よ躍る
左の書於松の風無妻ハして
人綫書く言吟脉綫あさし於
游子よ久堂妻りの情行

かの姥ゝにもとうべや一笑の
実説うる南布に傳く藻守よ
記我む人手魚手

天明七丁未ニ友善菴

蛾基出



春陽家戯幸てる千里の情戯すもるより
やらく様の若がれし切り足出ひりためよう
門出の戯ま了に成てし落葉志つく
藻よりも家をとを重ね形勢程　二葉居 葉芝
おもひくれ有り侍る腹白記とかふを宅世
すゑとりも女数ち家に族よ尽く皆ひよりする
ちうしちかする志事しゝ志るりかやを望
きまも汁すまでとちうちとまみちりき筆
侍しぬりけんと從ひまる之白印すつかひ
志るすへき事を物し次

風雅の沖の汐かひたるゝ波にくまにまじり
つゆはつしら縄中にも島灘越わたる海士の
袖かとたぐひなくしかれりけり
雲霞を我等にかけて舞ふ翁

須磨浦

芳樹く桃遊ふ浜辺の春木の
日かけし波音やさりの家にて朝しも白人家の
まつ里のまゝ海りくるに以曽やわたる人家
ありしを継る人のかきつまこなき我なり(?)ちる
まふたつしくるゝ松をとりくなまし
やすらひの花にも人を西ひらし



西上人の志かまし逍遥なりし双林精舎の花の
もとに我等まてとまゐるへき人をとゞめん
たく袖のつゆを露もかなしなる
背とふるもとのものかし何をもつてふくなる
小塩なる中の墳の形の出世なれいと
婦りたる事もあり祇園女御の墓とふりし中
結る其あたりは流れぬ家にも志もちしとそ
志もく歩次羅蔡蒼色なりは旅りたしや
遊女程家に酔ねさまうたふ絃綾
楊柳我なるのなをひる志かなきんか

志賀京春日人のゆかしさ
花の名残も霞日ゆかん大和の奥をつゝし
かの於八丸のやよひ哉わきへと流れ大きなる
又吉ちる畦路糸ちかる
雛流よるとちなひる日傘すしの淵に捨ふ
幾春哉鈴流る松の流れ
紀伊の国にわたらんとく舟哉粟島の鉄
ましらむ
わらハ女か海苔摘衣やむし雛
吹上のうつろひしし
吹井かさ春風ふし細の中



紀の川ハ流ととく金の峰嶽より出るよし
吟とゝも称ひる志きに瀬おかりなり
花喰ひよ紀の川の水を流して結
かゝハ春哉かけしともつ哉なまし春なり
えとくろし持りくゆる程の流れ山に夏つまて
猿奥院よる入る舟あたり杉のつらし人語
帰るに飛鳥哉呼て清く孤月出林下
落く撫され凄寥たるかしさ待り響時
西棠の山たりん
嘯をかす流寂佛や春の山
女人堂

鶯のなく聞えん女人堂

細腰の旅人風にしたがひ雨にそぼちてきたり

語らふにやすら世にはあらしめわりなひゆへくし

日影もこれ弥にかかりつやうくしく

涼しくもりなりゆる日に

なふたちり春浅き田の沼に

としくれ行年くれし清吉禅のすゝ

めく山ふかきを尋ぬ常にもかはりてすゝき

夏のちしめとなりぬ諸や奥なる山の

すゝきをかしき所にあらぬ気なりの

空なつかしく賀茂の幽玄古跡の御ゆかし



只圓寂の幻すへにあらぬ心の寂のむかしに参入

只夢のたのしき夢ことに同じ雅情忽雲

外の一声に驚

扣しくぬれまし乎に雲浅き明りつ

吉水院に傍ひてたぎ浅き翁の心緒をなぶ

むかし吉むね夜ならで坊に妻

浪しくたをて詠き紅葉と吉そえしかの

清みをとるに寺縁なるにゆきてかなる庵

の扉にしき計ありし聡なるにひとりの心あり

此経よし侍る山家の花吉とくま入りて雲ま

路の若き浅茅の名になひ老ずへ八十余うしき竹の

凡よそ深山つゝ芳野山居集とら影せふ
こゝろの秋哥ぞとのし、過ぎる言とつの
冊子哉あたへらるゆゑを萩をいさへる
むかしのさまおんさるゝ待つまくかゝる都の
くさ世のうちよりへしうしやすし何にも
清浄宋徳や喚景名所哉告ぐ此ころ
しく

借たなく命とくの昔清水
たのしく山路哉もれもて
みんなよりゐ穂麦うましき萬花
讀田具く



こゝ縁の子の鏡捨くて落楓
南都ハ一書あなつらしき之所の於ゐ多
こゝ路さるもたまハひとの目に多目とさす
てかみことに絶えてくに住めふ奥閣
所して元寒まて坊舎蓮哉並へしまゝく之処
於絶の杜鏡なりしにさの名襄慶の附偶て
多くハ千載の叢にとくめ只村老の口称す
さのく
磯辺の花に文字隠む広哉
ま日野の由りある社務何うしの除に
屋としきハ

筆に小康ことを書つけ裏の山

花の露なからぬ井手の汲りるて宇治の里に
出ぬは夕べ暮の雲杉むつら林を橋の小島の
色を抽の汀や翁のわさうちたまへは稲置の
こゝろしく泣ぬ

楼雪のつら枝に春て啼　水鶴

弥生廿日あまり里程の庵より入かへ里の秋に
志すらひ更に実地に斬労我やしなふ
り景

月読浅からし市中の夜

小山に桃我ひと日寂寛境に在るなり侍るに



高き花の嵐の出すりて古きさもしく
かうつま実の中きたは池の汀の春すかひかして
更に女院の浮泛りさ海双眸にうかみていか
みをとうる縁流むへきは清浄の絶鬮し壌かま
小家我捨てかゝふ香に花く草紙の秋

日影返や薄我のなる蝶の色

大原北里扮深く尋ね入りてかの在中将の
雪我もちひしその衣さをひとうたかうん
忘さらし惟喬親王の古廟我泣ん

卯の花の雪踏くする凋み

高利しの滝

夏一百日寺めしの滝に草枕ん

矢背坂越くにかゝりて台廟にのぼりて三鈷
のうたくとめて見えて

帷子の目につゝく児よ秋盆や剃る

夜の月をまや横川の杉の木末に涼しく赤ゝ
ゝ講堂の庭に似さうちたゝく一日の若薬銭
らるひと日両後の言快く晴わたり峯
にのゝさとゝく鐘鳴る寺へゆうて待る僧の足く
にのの花よすろうくとせんすへきふくらうう
しつく高船川に出るに黄昏銭をとうり

古人魂る蔵三夜とり出す船の寺



蝶年

てふのくるや膝みし河に又蝶まえ
梅津ゝつゝの境つたひに柳陰の遠近五歩に
懸ひ十歩にゆす

桜子の花まよすえむ風情なり

小塩識

夢りや麻にうつて塩識の所
既に雲となりつさの下とたとくしてまた
やうく波王寺の禁裏に出てやとり銭をともむ
夜情夜に似つて泥むうらし

隔月夜四面に外の落葉哉

松吹風も志紀の音をりやすく蚊の声に風そよ綫
弾ずる事くに寛しくいとひ取ひたる梳れ
さ済なりしに簧子落て蚕はろくと
飛あかりき蚊帳は綻まて昨より綫さた
弾じてつゝ足綫中をとひてみやれく
一楽綫はらん
弦弾や影こそとる蛟の山崩まより

寓居

弾くたまさを人に月の命ゝ
桃ゝ後の事に芦花菴に沿曳を継せ
尾陽にゝあるへきし山の桃さちに明ゝ忠



伊賀の出松山の葉菴大和の
出めたてまつりてことひ給ひぬ
のなまとりしかくりし歌集し
日記やりのきの綫ゝすに柳ひ
はれなきしくよしく介まひく
すゑなき八
稚まこん清吉婢の蚕之蹤の蟻
月八夜明 明ら雪の 夜
糸弾ゝる歌庭に石を積みて
大佛たれと纏く 割々や
繒きく猿うし山の雲和にまく

暁臺
葉芝
外央
佳棠
芸之

眼にさへちらちら光る星　臺
はなれてもめくる笛の音すみ　堂
興にのるする家秋草のかけ　央
月かけに誓約せん伊勢の松　臺
春の夜も節季を寝る杖　芝
蝶々の名をなく人に擲て　央
一日ふりき雲のかさなり　堂
縁側の縁にかけつ宿の簾や　芝
彼岸筆にて[illegible]　臺
ますます八線の[illegible]　堂
正月たちし人のまつり　央



里の蚕種はやむとあらよ　臺
かの粽造る山の[illegible]　芝
鏡立[illegible]飲む酒の我家　央
身拭[illegible]地を[illegible]　堂
麦[illegible]笠の　芝
水とりて集てある[illegible]　臺
[illegible]たてや[illegible]　堂
唯目あの[illegible]　央
茶釜に[illegible]山の松の風　臺
騒[illegible]耳[illegible]　芝
螺貝も[illegible]吹[illegible]　央

そこのゆふくれ髪結ふ帰る　棠

副車押るうさの萩の月　芝

功徳池に魚たちぬきぬらく　基

美女すゝきに罷をこしの枝つゝ　棠

家に来なきさ熊野路の奥　央

嫩さしの藤の枯枝冬に刻く　基

日の西へうつる二度となりけり　芝

ゑ庵ともめの寿さ蔵にゆ出　央

扇线揚る寺　柳の風　棠

名録

新年の线出来るるも　平安 棠更



宮の南ひる鰹猫の壱屋声　卯央

柳にとりまく干潟をゑ鳴　百池

竹の名や月に葛村さきおち寺　佳棠

草くやなつかすせに秋の風　東湖

富さ打に郷の光りや小夜時雨　在京 観凡

夜の月みなるさらへてくるとも　明峯

海浜

夏影に鰣（イルカ）割さしるみやらし　樋賑

うらひすの孫鮫駆ける凡兎集　十二八 卑桂

海岸のきてるやんでる秋の風　、兄き

うらひたての桜鶴麓の声のことゆふ　大津 鷗道

待宵

我たひら旅うらやむよもこん　平安 几董

雲のゝ稀けふりつ千ち隠れり　越後白根 文和

雲ゝすゝ志けつまた二き種の月夜かな　袁鉤

月影やふたつたちて冷し風　崚湖

日ハ水に入て芦そよぐし飛人　加州 元室

夕影や草のふみる花の薄　仙台 似宮

文通

秋の秋の明くも去ゆく月夜かな　名古屋 士朗

花はりし立ても八草の程限し　万似

かんこなる逢坂の杉ことよかりけり　似青



あり白にわけ入ハ売とき吹つけた　羅城

風細や菊の寸に月夜さし　閑竜

あり白やふかきて涙さし夕鐘　多岳

ゑ橋よくさ明の月のかゝりけり　亜浪

うらひすの葉をそみ浪露　纯舟

胡朝よたまて粉のゝおもふ娘かな　東壺

喋しさや散る鳴との八秋の声　桂之

木の香よりかくさ出て重穂　五周

さし踊の月夜よ振ひとん　純風

まつ蛙坐し守浴紙出来なり　沙漠

人の家の裏から出て月待の山　岳輅

永き日や鶏は経ても霞見え　少如
蟬さゝんやうれしく切りの梅花　什之
去る国の雨ふるを花のかけ　葦雷
織里を拭夫の傳さへ春の月　昆明
雨止て鶯さゑしみ　越毛
来りし志の路を並ぶ菜の花　稲城
休櫨く夜なつかしき夕かな　素泉、
二日月下す志道を辿りけり　呼鳥
月や日やうまはつはし桜　双府
移むしの声なくなり星月夜　玉墨
すれくし休むつ彼の氣力かな　森良

數字や聲くはかまた盤の数　狙乃
みなのしやまつしと虫の聲鳴り　白圖

天明七年丁夏六月　於洛陽旅宿著之

春の曙なまめく桜の花匂ふ
秋の時彼の時とはしる人
人間の知の涯までふる雪の内に
淑気葉落さへ霞の萌に
夏やはれんそれは蓑人その上に
いたせるに似て出きるなれ
大和撫子めく紅に咲たまゝに

とゝめ懐ふしとかはしひ楚も清見
道ね振るの無寒夢なり必
挟木屋銭師とする人をさと
入来ハ素ニ恵み落るへし
　　　　一丈仙



秋のもしら

　月見

大仏をはこして奈良ふく後の月　白図
新酒銭ひらくむら杉の色　暁台
白馬の四ツすまに蒔銭持て　代青
扇よ織る名銭まかしかり　羅城
砂まき戸の忌方より恵る浅の音　蒙水
屋ゝさわく鐵ノ多来のゝ雨　閑雀
桜もつみ恵み銭波銭出ていへし深　基
童館ゝの松もつと桃さゝ　図

くゑ火鉢の二夜ならかゝ下モよ埋き　球
まろかくと握りゝの皮　圭
鶯の尾よ縄懸て出る月覚ぬ　毛
人の木履我もくと踏こされ　水
茎の穂のこれからつ向く月露し　士朗
押くる茶を守する茎の湯茶の秋　基
摺墨の曲りし形ある紬の袂　圭
わりひ竜田の山の夕ゝ雲　毛
咲花よやつと覚出る糟俵　図
隣の家のうたまる素読　訥
多き燒こぼり焼栗と寝よなり　水



玉まつり九寨なり能くらり　球
精進堂の楼つらく眺よけ　基
四五町先へ銭をかゝつて切　図
場桥ふち彼のまゝ二人出て　訥
亀の尾の姿こそなるおもなる日　圭
草生の霜との乙女あり　球
車の瀧よ切る家川なまく　水
筆の毛書き思ふ銭おふ杖の月　毛
山晩ならは四日銭ありし　訥
一休の拄杖とくむる松の蕾　図
奥嵩は館よ清くて桜なり　基

潮風の日震ひ延残咲まへり　水
人とふもしましの日とおさく　毛
家こそおさまるふる穏　青
羽織のこまつし暁の水　城
花黒き布九山のうしろ山　納
緑先も見さこさしの読声　暁臺

白図　五　暁臺　五
試青　五　羅城　五
蘭水　五　閑毛　五
士朗　五　桃茉　一



草居

わくもれ又箱との夜あらし　岱青
むら雨ふし蝸のふかぬる　士朗
美男がほや棘々中の捨小舟　紀風
紅役の今うく宜葺し　入素
月ふてし稼もしくの上落後　暁臺
蜜柑残ちぎる藍染の皿　青
枯山のこと思ふ猫の塚行りて　納
杉りしろつさ人おさなきかなり　風
業八家白木の雛のゆるし　素
若さ猪かくなく乃の上八弾　臺

子ある時ハ門の外ト八ッ乞兒　青
地蔵割せうなる宵月のかげ　朗
玉の杯今宵萩や咲ぬらん　風
何ごとも無きさゝ恋の筆勤　素
夕ぐれよしの何ぞ六角因幡堂　基
寛平の代のはなしきめく　青
去年の春まてのはし橋ハ論無なり　朗
東風の中ニ高き城むかくる　風
折られ絵物うき絵凡新在家　素
汁か事ハ数ぬ新南利　基
百度参ハいつまで頼むかし　青



蟷螂生るこの世の露　朗
此所なくて果屋の常静か　風
根つきたる寐し松しぐれの松　素
こよひの寺社の墓参をとふしけ　基
さしよる夜旅路る秋の月　青
実生茎ぞ旅路ふる山の杖　朗
名高き物き川りふかすし　風
ゆきりゆふ露の肢毛よ旭さし　素
神の御祭の壇花のひ出し　基
十五女ハ見ぬ女のおそろひ　青
きしくよよのふ学の宗　朗

亀山の堺の月ふく雨雲よ　鳳
蘆荻ゟ残送るこちらの菜も　素
ものゝとし　鍬の鉱やおそらん　蓼
さむらひ烏帽子のとり来たり　喜

岱青　八　　士朗　七
紀鳳　七　　入素　七
暁臺　七



花臺

花ふり人皆見よ月よ　羅城
うけ由らくと蝶舞の毛　蒙水
葉の波芽たく褒めさて　間毛
牀川色めも垣根倒るく　楚令
所く月残定めぬ雨の雨　士朗
角よかしまる萬家のゝ康　猿丈
名も折くと家残掲示林の風　白図
皆よれそへしき津和云　暁臺
銀の笠よみを満く寄せ　水
つましよたる行方の海松房　堺

飛りしの宿に志坊と並べつゝ　分
兎の足跡見ゆるあられつゝき　毛
我まとのゝ掛ても無風雲　丈
に影桜によるゝ三條さき　朗
芋植しもゆ人悔る礼なき　基
餌を泣く猫抱して寝る　図
春の月つきなし風ゟ人往　塚
簾あさき星の切ぬけ　水
水ゟ舟乾而色石に箸付けで　乗
絶ひ云つふ吏婦八十　分
三ツ鐘なふなより緩よつけくとて　朗



無

志ちきましく冬ぬくの袖は寒　少如
こゝ織ふ本つ代統ふ足袋の紋　岳輅
小盃京水よ鞦ふる人ゝとなく　稲城
畠の鶉の番ひの集るや　暁基
神月よ御車並み定むらん　呼道
並むよ海も斎る後の秋風　如
罷灯ハ蕎色取られ勝荷く　基
業あよ於くましし源予の箱　芝
嗟の葛と志ゆつく声よる　輅
大滝きりの界ハ志ろ雪　塚

としをへし数多娘めつらしや　如
足利義代は未とれるを　輅
振捨やたゝ伐出ん山の月　き
娘までかりそめに菜売なる身　基
下賎の女業遠ひにまなる　枕　堞
肩に掛なる服なしいとをり　如
花のあまはしらしなる春の面　輅
絡業なつせは蝶の行とろく　き
黙路の末仁和寺の皇子隠へ　基
身中しみするに花をたをりて　堞
梅とちいさは中刻に函の縁出る　如



枕のをとをまちかさきまて　波　文
装裂袈裟玉との袖を墜ちり　図
見へみそ血の身を拭ゝる　基
それの声外面の薮茅に紫て　水
たをもひ寄し半まき切含ふ　堞
行とやら鳥の云多き人の後ト　令
名をたゝかりのなりに清残　毛
桂川の月より明く霧の松　丈
笠しみかへる屋根の端染　朔
身の枝残清き縁る枝とま　基
とて逢事さ　風の清き　図

山鳥の声の中より暮る日や　堞
まよちらく霧さ雲夢せ　水
花の陰産子包し加ら録　毛
作らさこ了しら那く草花し　分

| | | | |
|---|---|---|---|
| 羅城 | 五 | 蘭水 | 五 |
| 閭毛 | 五 | 楚分 | 五 |
| 士朗 | 四 | 珉丈 | 五 |
| 白図 | 四 | 暁臺 | 四 |



大角豆かつるのはさみよりて　婚
縄ふしのさま作なる豆實　芝
関に隣を捜ふ夜中の枕帰り　臺
南さ次雲に沼津の海の月　堞
小荻根枝に塩辛残る　如
秋蝉のなきかりに冬毎を　婚
悲明く待る星の朔日　芝
おもてに晦成ひ成る葉の彼　臺
茄葉男のうまし浴々　堞
南画の花覚さ彼岸桜哉り　如
さ夕里の柳うらびす　婚

風巾の糸破人の足にからまりて　芝

盈若張か斎る穀のむつりし　堪

芝も隠く嬉う垣根ハ芝のつる　輅

塚とくとるをとうつむ三絃　基

少如　七　岳輅　八

稲城　七　暁基　七

呼道　丶



春

今は冬のなかりえよ海つらく　暁基

やすらひの眠もふかまりま家路なるを　代青

とくつさあと花咲く玉の緒志くぬ　出朗

梅柳さのふの枝ハなかりけり　白図

うけるつるよ絹物をほ出て精穂なる　岳輅

まつ霞も長く飲む数山のほつしれ

相見のたえれと雲り揚する人なきや　千々 筆綵

ふきしき筆も足りて空也の畫の雨　ヲカセキ 趙兎

古徒の玉兎なきさせし時なるへよ

さすらへて

西は山かくしうせかけし春の雨　紀鳳

鶯や日枕出ぬうちの薄月夜　ヲカザキ 桃生

うぐひすの鳴なく帰る竹籔哉　曉臺

枝さくさ桜の梅の朽木かな　フカサキ 素洲

とかくして残焚山やおほろ月　チタ 社尹

ちよりて梅の花ちるをしきさらぎ哉　稲処

人先きく深山の花残志ひなり　碧六

朝日に出る花の芳野かな　チタ 裳兎

揚ひばりたゝ春の日に百ぐさ哉　同 可有

正月十三日伊勢の宮に詣て

掛り欲の神事を見る

春風やあそぶ酒の獅子から　士朗

春柳より山路の江を出たり　曉臺

水無田や芝ふく道も春の人　呼道

行春を惜しまぬ人は情なり　圃曉

白うおや春の猫うく夕かな　一声

菫ては草のうちやや春うらす　文朗

春雨しと鳴出せるや蛙の声　古人 祖乃

沖雛や粟粒ほどの鼻柱　入素

夏

行るゝ所至るゝ紫ぬ　石岱

卯雲のかゝる入日を隠し村の雲　（イヨ）董芝
夏の夜は線よりひらけたり宮の上　麦水
西上人の枯野の芒うたゝねて
見るもし縁もし寒方壊の世の後
うちの人の嵐霜く年月後
諸ともせて送り暮る
照つくしも宮紀うとの芒かな　士朗
夕ゝ見や湖の水ゐきさうたゝき　昆明
虚家やなまこの浪の鱗牛　闇毛
かすも行るや二百月入る西の雲　琢丈
休の子や一夜まちつく八年まで　曉台



あめ入きやうく悲しき葉かな　寄友
ほとゝぎす線當てあらめんけしみむ　菖游
夏の夜の雨たゞく明るまゝり　羅城
満華春色あるみねんして葉の蕎麦　（チタ）台冲
若葉の古ゝしくなくさ月ほと　（ヲカザキ）卓池
声ふし今まとハ世の帝と記れ　曉台
うつゝつゝ前りめくなるまゝり　（チタ）扇洲
風月まふらん芒の下世血葉　趙鳥
三輪の行ゝうき線ゐるとて
郭公顯ハ雪けとと山のおく　士朗
蓼かくまんま雲線垂おもひ　岳輅

蛍袋わふこく縁や庵の吉野近　暁臺

蝿うちのふえつきれまって蓋取に　桂五

まつ松魚西瓜も桃の出かりに　白図

剃髪中のまとのひとくふれ　沙莫

了暁あしめの年　六月二日八

年桐雨信長公の二百年に発句

わくも世たすふしく尾張の雨

總見寺にて懺法供養ありて

おもくとり行はるるに躋す

つゝふゆはゆきて

けふの法流ものつゝも草の露　暁臺



桂鎗わしくとめたるわしくに　平安　臥央

わか葉しくしらはなに繕りに　楚谷

夕立や麻の葉なかまに通り　代青

長良川みゝく

こ紙のはなもの紙鵜舟　他郎

はなくる風情花葉の擬に　沂風

纖蔓を含むや似寄れき児の花の葉　チタ　北橋

秋の夕くまての戸をはしる客に　白図

由ふへとまかいつまとまてほし　紀鳳

秋

枯くさのきれくそみえし林の山　士朗

いつく海のよるも秋の中ふ入り　羅城

四五日やとのよそも色ぬる浦ノ
いつ田よ稲ひく　チタ 大年

浦舟やかに芦の葉も秋の色　岳輅

わりなふ事もひたき月の光かな　常秋

色見えて今日は本尾まで一面かな　七人 子京

わらかしいつなかりけりみるかな　暁臺

雲くの旅よ涛草いろつゆぬ　呂斌

秋風や芦葉の花の白のさびしさ　貝山

月ひとつ手ふ水の揺れかれ　耕魚

すゝしさや霧の香ふ匂ふ女房花　チタ 鈍平

雲たえて月よ旅のうへの形見も　、士雄

月見たく旅に出しなる山の上　暁臺

夕汐のわきかへりたる秋の水　閏毛

鷸やかつかつ舟とて小半月　チタ 荷葉

蟷螂の斧を振りけり寄絶し　、罷聲

さびしさとれゑしぞあくる柿喜し　桃江

稲色見えず焼かれて枝ぬかれ　チタ 木人

秋の清水の行かてさて秋の雨　、外尼

つゆ笑ぬうるもの狐ふみける　、宇交

柿の葉の霜にふ落るゝしつかさ　、馳呉

朝うぢの花高くして　山志津か　杉六
娵がう志ぬひとり　圃嘯
うそさ雲の檐をはなれぬ小の月　万丈
穂芒の乱れてし菊むきさかり　魯洪
露繁の玉うら崩し志たり曉の露　亀文
小さうしやたゝ辛生なる薄紅葉　岱青
鴫あらくや社の中と山かわる　絶風
焼栗や梅のうへに罷る蝶　沙莫
切株や修よりはふ伊勢の山　昆明
行うつるや多雲の忌ごころ　稲城
霜秬の二の穂かり也月夜哉



八月の雲おりくるや鴫の声　珉丈
まつ茎を松露を唐の灯ハ細し　士朗
山鳥の浮ハ八麻の秋子哉　暁臺
夫八ちをひろハらんハぬ小菊哉　白卜

冬

冬撲なしや八伊吹おろし哉　亜満
鳥羽田の六時雨侍し水菜船　暁臺
たそう鶏をたすく月雪と衆まつり　葉水
冬木立たゝずや墳加への墓志るし　東壷
いろくの人そしや冬の雲　少如

炭かまの雲越崩すや丹波山　計之

雪ふかう焚捨し海士が汲　大阜

鶯の小藪隠れし世たつ時雨　羅城

鉢たゝき海から宮へ伊勢参るら　素洲

枯芦の残を都く月に音流　(チタ)呂宙

寒さをや鰭塩けつる棒の篭花　子縄

むつかしう往や枯埜のひとつ家　去明

志くれまつ隣は閻魔の日となりぬ　及波

油むすびけくゝた枯れ　楚舎

雪ふる跡に又枯柳と築りまなり　呼道

曉の雪志つかや年さなり　傚青



雪の日や野つ志ゞ畑の夕かゝり　素角

雪の降だら日隣の人ゝに訪　まゝく

雪寺意気になりし酒のすゝ白　餘文

降雪に春ぶけ明る小志力合せ　四光

とれあらくゝる挽く何宮の翊　眠情

月のしかの里ころ蔭の達乃山　宇久

さゝ山や夕日まがらに時雨　沂凡

蝶に備残よこれ十夜か菊　強呉

冬日影鶴の待ぬよく走し　入素

菜の花に青葉の蝶かゝるか　桐門

降雪の中よりゆきゝ出る戸口哉　平安 桃睡
枯たりと鶯あけゝり初音哉　卓池
うち割て枯たきさへや雪の窓　梃生
一とせを思ひかへして年を惜みけり　閣毛

天明八戊申臘月

蕉雨叟在世の俳諧といひ給ひ人と
三世常梅綴りとりけれ共かく
こそもの言し　路右主人此
なり男一生志乃出しけるを
まち代茶園の庭雅想みて
七部を集めまねく世の寛と
なしぬ是作意とやいはん

ましてやいたんあゆよの
よしみに物うけ侍りぬれ
ゆるせとく

文政十二とせの
うしの秋

松年鳳臺書之



| | | | |
|---|---|---|---|
| 俳諧一葉集 | 芭蕉翁發句附合文章并活例則 書簡消息ホ委ク集 | 前後編 | 全九冊 |
| 俳諧故人五百題 | | | 全二冊 |
| 掌中故人五百題 | | 横本 | 全一冊 |
| 續故人五百題 | 一具庵撰 | | 全二冊 |
| 近世五百題 | 笠庵鳥吟撰 | | 全二冊 |
| 嘉永五百題 | 愛川撰 | | 全二冊 |
| 今人五百題 | 東溟撰 | | 全二冊 |
| 續今人五百題 | 梅本為山撰 | | 全二冊 |
| 安政五百題 | 俳禅居墨芳撰 | | 全二冊 |

近世十家五百題　過日庵撰　全二冊

今人百家五百題　仝撰　全二冊

安政附合集　半青居新甫撰　横本　全一冊

文久五百題　半青居新甫　閑樹園菊雄　合撰　全二冊

元治五百題　艸中庵希水撰　全二冊

明治萬題集　月の本為山撰　夜雪庵金羅増補　近刻　全四冊

蒼虬發句集　過日庵撰　全二冊

同附合　全二冊

俳諧寂栞　卜雄撰　全二冊

仝鐃舌録　元木網撰　全二冊

曉臺七部集　竪並集　[illegible]　佐渡日紀　ちまき歌　秋の日　夜のたゝら　全二冊

大補季寄持扇　山金堂撰　横本　全二冊
是ハ四季の分ちて古事来り并料木氣衣食法へ往語を加へ初学の見安きためにせし季寄なり

嵐雪句集　全二冊

發句古今選　全二冊

今人發句集　全二冊

護物句集　全二冊

俳諧文集　全二冊

俳諧苗代水　全一冊

正信偈訓讀圖會　全五冊

釋迦實録　全五冊

歌學提要　全一冊

篤宇楷字盡　初代三馬撰　全一冊

多紀先生著述醫書類

其他俳諧書籍類

書林

唐本和本佛書石刻御經類
諸家御藏板賣捌所

書林

東京市淺草區東仲町五番地
淺倉屋　吉田久兵衛

墅並集　几志るし　幣袋
佐渡日記　志をり萩
秋の日　萩詩ゑら

暁臺

# 俳諧七部集

全

東都書肆　青雲堂英文蔵

14
3157
32
41